

岡山県生涯学習センター機能強化基本計画等検討委員会第3回会議 議事概要

日時 平成23年6月27日(月)

13:30~15:00

場所 県庁南庁舎3階会議室

1 開 会

2 議 事

(1) 岡山県生涯学習センター機能強化基本計画案(案)について

(2) その他

3 閉 会

< 議事概要 >

基本計画(案)第1・2章

事務局から説明

委員	事業・コンテンツの考え方として、テーマが3つあり、「地球・宇宙と科学」は、プラネタリウムがあるのでイメージしやすいが、残りの2つは、具体的にはこれから考えていくのか。こういったものは時期的な問題があるが、例えば、環境分野で言うと太陽電池など、どうかたちで実現していくのがいいのか、事務局に考え方があるのなら、先にそれを聞かせてもらいたい。
事務局	資料の第3章以降に具体的に記載してとおり、施設の構成は、3つのエリアからなっているが、先ほどの3つのテーマに即したかたちで、1階・2階の活用を検討することとしている。「地球・宇宙と科学」の部分は、大きくは2階のサイエンスドームを活用していくことを考えている。2つめの「地域資源と科学」については、産業・技術エリアとして2階の一部、企画展示室において、ものづくりや先端技術の提供ということで、岡山の強みを生かす、県内の優れた技術、オンリーワンの技術や科学に目を向けるような、郷土岡山の思いをはせるような企画展示エリアと考えている。それを実施するには県内の企業や大学等に協力をもらって、コンテンツの中身を構築していく必要がある。3つめの「暮らし・環境と科学」については、日常にあふれる科学に気付き、感動してもらうということで、科学体験・学習エリア、特に、科学体験・学習広場での事業展開を想定している。ここでこういったことをやっていくかは、第4章以降で説明していくが、NPO、大学等と連携しながらものづくりや実験教室、ワークショップ等を展開していくということで、実際に子どもたちと一緒に作っていく、体感していく事業を想定している。
委員	そういったものを常々考えていくような、何か核になるようなものをどこかに作るという意味だな。時期的にも、あるテーマを持って中身が変わっていかないといけない。作って終わりは、すぐ陳腐化するので何か保証するようなシステムは考えているのか。

事務局 限られたスペースの中で検討していくことになるため、テーマについては、時期に合わせて選択・抽出しながらプログラムの内容を入れ替えて運営していく。その際、資料39ページにある運営協議会において、産学官民の連携・協働の体制を構築し、企画内容を検討していくことをイメージしているが、その中で「つくる」「みせる」「とどける」という3つの柱を示している。この体制が出来るかどうかは、事務局の中でも検討をしているところだが、例えば、「みせる」と示してある企画展示の部分でも、時期に合わせてどういったものが考えられるか、どういったところと連携していくことができるのかなどを具体的に検討していくイメージだ。タイムリーな話題を提供していくことも、たくさんの利用者に来ていただくための重要なポイントだと考え、そういったところを押さえながら、検討を進めていくような組織運営にしたい。

委員 この部分は、理念的なことが書かれているので、製本するときには、「『ページ』を参照」のような記述を加えたらよいのではないかと。

委員 資料の冒頭で、平成20年度の議会において、行財政改革の一環という理由があって閉鎖したのに対して予算を付けて復活させるということで、今度は失敗は許されない。何をもってその予算をかける正当性を出していくのか。利用頻度なのか、年間利用者数なのか、何をもって測定するのか。前回の閉鎖は何をもって決められたのか。宇宙だ、星だの、そういう話もいいのだが、元々の話が見えないので、補足してほしい。

事務局 これまでの経緯は、資料1ページに記載している。旧県立児童会館は、児童福祉法に基づき、子どもたちの健全育成を目的として、主に幼児を対象とした事業を展開していた。行財政改革の流れの中で閉鎖となったわけだが、最大の理由は、市町村との役割分担を考えた際、各市町村に児童館が整備されていく中で、大型の県立の児童館を継続していく必要があるのかが議論された。その結果、市町村に整備された児童館を活用していけばよいということで、閉鎖という結論が出た。県議会でも理解いただいた上でのこの決定については、覆すことはありえない。ただ、この施設を子どもたちの夢や希望を育む何らかのかたちで有効に活用してほしいという声が、県民や県議会から出てきたのも事実であり、そうした動きを踏まえて、知事から、この建物の活用について検討せよということがあって、緊急課題専門プロジェクトチームが設置され、外部の専門家からもヒアリングを行いながら検討を進めた結果、本年2月議会の提案説明において、この施設を未来につながる科学の発信拠点ということで、新しく再生していくという方向性が示された。このように、今までの県立児童会館をそのまま残すということではなく、別の施設として再生していくということだ。しかしながら、行財政改革の動きが進んでいる中で、新しい施設を整備するということの正当性・妥当性について、どのように評価をしていくかということは、しっかり考えていかなければならないと認識している。児童会館時代のプラネタリウムの利用者が、岡山市を中心とした一部の子どもたち1万3,000人程度の状況だったと聞いているが、この施設を科学の発信拠点と銘打って再生する限りは、多くの子どもたちに利用される施設でなければならない。そこで、今回、3万6,000人の利用者の数値目標を掲げ、プラネタリウム以外も含めると、8万2,000人程度の利用者の目

標を設定した。したがって、県内広く、出来るだけ多くの方に利用していただくことことは至上命題だと考えている。一部の方々だけでなく、県北の学校にも十分活用されるためには、どうしていったらいいか、来るだけでなく届けていくことも考えていくべきではないか、そういった視点で利用促進を図ることによって、この施設の意味をしっかりと打ち出していくことができたらと考えている。

基本計画（案）第3章

事務局から説明

- 委員 県北から行く場合に、倉敷科学センターとこの新しい施設のどちらかを選ぶ場合に、目玉と言うかよさはどこにあるのか。県北から言えば、倉敷科学センターは、施設・設備的な面、駐車場の面、また、J F Eもあるということで、遠足や社会見学のコースとしてよい。
- 事務局 1階の科学体験・学習広場では、理科学習に対応した実験・実習が出来る点が一つだ。学校との連携を打ち出すに当たって、学校の遠足、課外学習での利用もさることながら、理科の授業の一環としてここに訪れていただいて、プラネタリウムを見ながら、また、指導要領に沿った学習が出来るとか、あるいは、子どもたちの理科を学ぶことへ動機付け、意欲付けのための高度な実験や感動を呼ぶような実験を展開したい。倉敷科学センターの場合は、実験のためのスペースが狭い状況にある。ここは、100点以上の展示物があるので、一斉に自由行動させて、それぞれの展示を楽しむことが出来るというメリットがあるが、必ずしも実験・実習環境が整ってはいない。もう一つは、遠足を想定した場合、新しい施設が京山地区にあるという利点を生かしていくというところにある。周辺には、池田動物園、京山ソーラー・グリーン・パークというアジアに一つしかない集光型太陽光発電施設、植物工場などがある。各学校にメニューを提示して、この施設だけでなく周辺施設を周る中で、いろいろな体験が出来ることを打ち出していくことも考えられる。
- 委員 前回、倉敷科学センターを見学したのだが、体験学習できる展示がたくさんある。職員による説明はなく、とにかく体験をするというを目的にしているとのことだ。だから、「なぜそうなるの？」という科学の原理の部分を押さえるようにはなっていない。何回か来るうちに、自分で勉強するとか学校で学習するとか、そういうのが狙いなのかなと思った。その点、新しい施設はそういうのではなく、より突っ込んだ科学の学習という面がメインになってくるのではないか。
- 事務局 展示物を置くだけのスペースがないという状況の中で、コンセプトとして、いろいろな機関との協働を考えた場合、人材やコンテンツを活用していこうというのが一つウリになってくると考える。周辺施設・関係機関との連携の中で、この施設だけではなく、他の施設とつなぐことによって、バラエティのある遠足・社会科見学・授業のコースを提示していくことが考えられる。
- 委員 先日、東京出張の際に、多摩六都科学館に行ってきた。入館料が500円、プラネタリウムが別に500円、計1,000円かかった。小さい子ども連れの親子、子ども会の団体がたくさん来ていたが、新しい施設では、入館料を取らないとい

うのは大きなメリットかなと思う。入館料が200円となっている倉敷科学センターと比較して、それ以上だと高く感じるのかなという感じがした。20ページのサイエンスドームの図面について、ユニバーサルデザインの関係で傾斜が12分の1となっているが、プラネタリウム及び全天周映像を見る場合は見上げるようになるのか。見やすい工夫はあるのか。

業者 工夫としては、例えば、座席の背もたれが、前の方は120度傾く、後ろの方は90～100度の傾きにするとか、角度を変えるという方法が考えられる。最近の新しい施設として、名古屋市科学館では、同じく平面タイプで、ドームの中心であったり、一方向だったり、椅子が自由に回るような工夫がなされている。

委員 バンクオブアーツ岡山が運営している旧日銀跡のルネスホールは上手くいっているケースだと思う。県から賃貸で物件を借りて、民間感覚でもって運営し、黒字を出している。何が大事かと言うと、ソフトに関しては、NPOが仕切って自由に次々とコンサートや展覧会をやっている。行政主導でやると、これは展示してはだめとか、利益につながることはだめとか規制が入り、身動き取れなくなって、おもしろいネタが尽きて、利用者が減っていくというパターンだ。そもそも論だが、人口減少の時代に入ってきていて、例えば、資料15ページのイラストは非常によいイメージだが、学校は3クラス以下だし、子どもの本当のニーズは塾だとか進学のための勉強だとかに変わってきているのではないかと。ネットやパソコンを使えば、いろいろな情報は得られるし、情報慣れしている子どもたちを前にして、リピーターを増やしていこうと思ったら、例えば、サイエンスドームは、真面目に星を見るのもよいが、星を見ながら、高校生のロックバンドがコンサート会場として利用できるようなと。19ページの1階のスペースは、なるべく物を置かずゆったりとして、自由度のある場所としてあまり手を加えずに、八コとして置いておけば、岡山大学の医学部は進んでいるし、太陽光発電だとか、岡山理科大学の好適環境水の水槽だとか、水源と熱源だけ確保した上で、なるべく自由度を高めて、学生やゼミに次々と貸していくような場として、運営の方法は、どんどんみんなで知恵を入れてある程度任せてしまうような発想でいけばよいのではないかと。きれいに出来上がり過ぎてしまっていて、これから先何か新しいことをしようと思ってもやりにくい感じがした。

事務局 連携・協働型科学館ということで、どのように民間・大学・企業等と連携していけばいいかを検討してきた。その中で、特に、1階の科学体験・学習広場を出来るだけ、主体性を持って民間の方々に活用していただきたいと考えており、「1階フロアの運営(休日・夏休み)のアイデア」という資料にまとめた。仮称として、「ウィークエンド・サイエンスコラボ」とあるが、様々な事業主体による科学学習・体験をバラエティを持って企画・運営していただきたいと考えている。学校施設と連携したり、いろいろな機関との連携を進めようと思うと、県がしっかりとした接着剤としての役割を果たしていく必要があるとあって、この施設を全て民間のある特定の団体に任せていくといくことが妥当であるかという議論がある一方で、県が何もかもをお膳立てするのではなく、それぞれが持っている強みを生かしていく場合、それぞれの科学体験・学習を企画していただき、週替わりでお貸しするようなアイデアもあるのではないかと考えている。連携・協働の相手である

それぞれの事業主体の意向確認をして、どんなことが出来るか、あるいは、どんなことを県として支援していくべきか、声掛けをしていきたいと思っているが、いずれにしても、1年365日、全て県が企画したものをやっていくと言うよりは、それぞれに主体的に考えていただいて、それに対して支援をする、場所を活用していただくようなイメージを持っている。人口減少の中でというお話があったが、いろいろと科学関連のイベントを実施すると、たくさん子どもたち、保護者に来ていただいているという実態もある。子どもたちをいかに引き付ける魅力あるプログラムを提供するかにかかっているが、少なくとも、ネット、パソコン等がどんどん発達・発展していく中、理科離れが進んでいる中で、科学が魅力あるものであることをピーアールしていくことが大事だと考えているし、ニーズとしてはあるのだろうと考えている。

基本計画（案）第4章

事務局から説明

委員 この施設の特長が、単純に見せるものではなくて、科学の学習の場であるとのことだったが、これは非常に大切な視点だ。「とどける」という出前授業的なことが書かれているが、ここは、ソフト的なセンターであって、もっと自由に、例えば、大学、集光型太陽光発電システムなどを取り込めるような計画にしたい。そこはどういった連携にするかという問題だと思うが、あまり小さく閉じ籠って考えないで、全ての大学を取り込むくらいの気持ちでやっていただきたい。例えば、プラネタリウムのきれいな映像を見た後で、天文台へ本物の星を見に行くようなプログラムをつくるとか。岡山理科大学の好適環境水の話があったが、あの大きな水槽を子どもたちに見せることは大切だ。要するに、ここだけに閉じ籠った考え方ではなくて、もっと他も利用して、上手くつなげていくと、いいプログラムが出来るのではないか。自由にやってもらうのは、お互いの信頼関係とどういう連携を組むかという運営の問題になると思うが、そういったかたちで、ここで何をやりますというふうにしらない方がよいのではないかと思う。

委員 鹿児島には、西郷隆盛記念館がある。地域の人に愛されて、観光客も地元の人も行く。また、知覧の特攻隊の基地があり、同じようなかたちでリピーターがある。岡山の施設も科学とか自然とか、人の名前がなくて、なかなかずっとリピーターとして利用するには、愛着がわからない可能性がある。言葉としてはわかりやすいが。例えば、ロボットスーツを開発した山海教授とか、何か岡山に関わる人の名前を入れてみるとか、岡山大学でも岡山理科大学でもよい。何か固有名詞を入れて、ずっと地域の人何かその大学なり人と縁があって、愛着が持てるようなものが、例えば、岡山大学医学部なら最先端の医療技術を持っていて、研究もしているが、キャンパスには入れないし、それを公開する場や情報も普段みんなは知らないまま終わっていて、世界に誇れる技術がいっぱいあって、そこと連携していくことをして、年代問わず、いろいろな人が5年、10年、20年と、「ここが岡山の科学のメッカだ」という感じで、通俗性を持った場として育成されてはどうかと思う。それがないのは、逆に言うと岡山県人として寂しいと思うし、

いいものを持ちながら見せる場がないのは残念で、これを機会にそういった方向でやっていただくとおもしろい。

事務局 閉じ籠ってないで、出来るだけ広く取り込んでいくという御指摘については、基本計画案の中でも10ページで、生涯学習センターの施設・設備、連携・協働する関係機関・団体の場も活用しながら、この施設はあくまで連携・協働の拠点として、情報を掴むことが出来る施設というふうに記述している。この件について企業の方とお話した際にも、例えば、この施設で技術について学ぶ企画展示が出来たとして、その技術は一端しか体験することができない。では、その技術を工場の中でどういうふうに生産されているのか、どういうかたちでもう少し深い情報を聞きたいかと言うと、その企業に出向いて行って学ぶということが、一番手っ取り早い方法だと思う。そういった連携の中で、情報が得られる施設として、実際にその企業に出向いて行く、あるいは、大学のキャンパスの中に子どもたちが入っていくとか、いろいろなかたちで現存する資源というものを活用していけるような、学びや体験の場が広がっていくような方向性を持って、拠点の役割を果たしていくことができると考えている。岡山の強みを生かしていく施設という意味では、「地域資源と科学」という一つのテーマが、正に岡山の科学的な資産を活用するイメージで考えている。特定の個人だけがクローズアップされていくことにならないように、広く岡山のいろいろな方々がいるので、活躍されている方々やその技術を紹介していくような場とすることが出来たらと考えており、一斉にそれを見せていくことは難しいので、時期に合わせながら入れ替えて紹介していく工夫も必要だろうと思う。いずれにしても、広く県内の強みを発信していく拠点施設として、運営していければと考えている。

委員 37ページの「管理運営を担う人材の考え方」で気になることは、子どもを持つ親たちがそういうところに行く場合、お金をかければいくらでもテーマパークはあって、入り口部分の人材と言うか、内容面の対応する人ではなくて、例えば、ディズニーランドで言えば、受付からエンターテナーというような人が対応する。最初の部分の人材をどのようにするかが書かれていないような気がする。

事務局 この施設を運営するに当たって、特に、これまでの議論の中で、コーディネーター機能を持つ人材、あるいは、専門的知識・技能を持った人材等をしっかり確保していかなければ、この施設が、魅力ある科学館になっていけないという御指摘を頂いていたので、中心的な人材ということで書いている。しかし、当然のことながら、この施設を魅力あるものにしていくために、そこにいるスタッフ全員が、その思いや内容を共有していくことは必要だと考え、そういった記述を加えていくことは必要だと思う。

委員 その部分は、非常に大切だ。一人でいいから、情熱を持って打ち込んで、企画されたことを足を運んで取り組むような人材がいれば、成功していくと思う。

委員 理念については、非常に詳しく書かれていて、目的もある程度書かれている。最終的に、利用者目標数まで書かれているが、どういう基準で目標になっているのか。これで本当に、達成されると何かが変わると言うか、目標の効果が得られるかどうかということについて、この数字はどういう意味を持っているのか。目標がたくさん書かれて充実しているが、優先順位が必要で、限られた予算と人材で

は全部は達成できない。どこを重点的に考えていくか優先順位が必要だと思う。リピーターが来て賑わっているところは、そこにどういう人がいるかが全てで、おもしろい人がいて、そこに行ったら話が聞けるというのが一番人を引き付ける源になると思う。そういう意味で、どういう人を雇用するかが非常に重要になってくると思う。利用者と同じ目線で話が出来た人をいかに導入できるかということが重要だと思う。私の経験では、天文関係の施設で、年に何回とか特別公開をして、一般の方にも来ていただくのだが、アンケートでほとんどの人が書かれているのが、「説明してくれた係員が、丁寧で親切だった」という意見なので、実際の運営に当たっては、そういった点に留意してほしい。

事務局 利用者目標数が、どんな意味を持つのかということだが、極めて難しい御質問で、倉敷科学センターとこの施設トータルで県民全体が必ず科学館を訪れるといった計算であれば説明しやすいのだが、そのようにはなっていない。ただ、なぜこうした利用者目標を設定したかと言うと、これまでの施設よりも更なる利用を促進して、多くの方々に愛される施設としたいこと、理科好きな子どもたちを増やして、保護者の方々も一緒に理科が好きになっていくような場を少しでも提供していきたいということで、多くの皆様方に利用いただけるよう、8万2,000人という数字を打ち立てた。優先順位に関しては、確かに様々な事業が入っていて、どこから手を付けていくかということが大事だが、非常に限られた人材の中で、生涯学習センターの職員は、一番に学校教育との連携、あるいは、指導者養成に力を入れていくことが必要だと考えている。一方で、休日を中心としては、センター職員ではなく様々な機関・団体の力・知恵を活用して、様々な学びの場を提供していくことを考えていくと、自ずと優先順位と言うか役割分担と言うかはあるが、平日・休日ともに充実した事業展開が図られるのではないかと期待している。この施設のウリということになれば、プラネタリウムが、県立の生涯学習センターでは、唯一プラネタリウムと全天周映像が入った施設になるので、そういったところをしっかりとアピールしながら、利用促進を図っていきたいと考えている。

委員 利用者目標と予定されている駐車場のキャパシティとは、釣り合いが取れているのか。

事務局 駐車場については、非常に厳しい状況となっている。少なくとも、現在の駐車場の台数でいくと、この人数がコンスタントに利用するようになった場合、日々満車状態になっていくことが想定されるので、拡充について計画の中で触れている。確保すべき台数に対して、施設の面積は非常に狭いので、必ずしも十分に確保できるかという点で課題はあるが、どのような対応策が考えられるか、引き続き検討していきたい。

委員 駐車場の問題は非常に大切で、30台から50台の増設しか計画されていない。8万2,000人の利用者目標を道幅の狭い京山地区の周辺環境から考えると非常に難しいと思う。小中学校を呼ぶとのことだが、どうせバスで行くなら倉敷科学センターも距離的には変わらないし、もう少しじっくりと、誰か子どもの科学に情熱を傾けてくれる教員なりキーパーソンが見つかって、その人を中心になって、次々とソフトを替えていくようなことが出来てから整備しても遅くはないの

かなと思う。東日本大震災があって、この国は変わらないといけないという中で、何にも変わらないのもおかしいし、来年着工して、再来年、更に先にして、そういう人材を探して、本当に科学の発信の地、メッカになって行って、みんなが自転車でも来るような場になるように、もう少し検討を重ねてじっくり考えてはどうかという気がする。いいものを作ってあとでよかったねと言われる方が、今の時勢に合うと思うし、子どもたちも来てくれると思う。

事務局

情熱を傾けてくれる人材が、中身について検討していくことが大事だと考えており、科学を専門としている教員、校長、関係機関にお話をしている。行く行くは連携・協働ということで、この事業に参画してほしいという思いは持っているが、この基本計画の策定に当たっても、そういった方々に御意見を頂きながら、引き続き検討を進めていきたい。